

國學院大學學術情報リポジトリ

新宗教の先祖祭祀の日韓比較：
妙智會教団と圓佛教の事例を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 和珍 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001692

新宗教の先祖祭祀の日韓比較

— 妙智會教団と圓佛教の事例を中心に —

李 和 珍

はじめに

日本や韓国においては、先祖祭祀は新宗教においても重要な意味をもっていることが多い。本論文では、日本の妙智會教団と韓国の圓佛教の先祖祭祀の観念や儀礼の現状を比較して、それぞれの特徴を明らかにしたい。とくに情報化の進行をはじめとする一九八〇年代以降の社会変化の中で、信者の先祖祭祀に対する観念が以前と同じであるのか、変容してきているのかをアンケート結果の世代間差で見えていきたい。情報化の影響をどのような視点から考えるかは簡単ではないが、ここでは情報化が進行する時代に育った世代と、成人した後、あるいはそのだいたいぶあとになつてから情報化を体験したような世代との意識の違いを比較するという方法によって考えてみたい。

日本の新宗教のうちで、仏教系新宗教と区分されているものは数多くある。その大半は日蓮・法華系で、創価学

会、立正佼成会、霊友会、国柱会、本門仏立宗などが含まれる。密教系も若干あり、真如苑、解脱会、阿含宗などが代表的である。こうした教団を含めて、『新宗教教団・人物事典』（一九九六）には百以上の仏教系新宗教が掲載されている。

そのなかで、霊友会系の教団は一つのグループを作っていて、霊友会の分派は二十以上にのぼる。霊友会とその分派は、先祖供養を非常に重視することが知られている。妙智會教団は霊友会の分派の一つであるので、この教団の現状分析は、日本の仏教系新宗教における先祖祭祀の現状を考えるとときの事例になると考える。

圓佛教は韓国の新宗教の中では比較的規模が大きい教団である。韓国の新宗教では、東学系統やそれに影響を受けたものが多いが、ふつう甌山教系、檀君系、キリスト教系、仏教系、儒教系、巫俗系などと、系譜によって分類されている。系譜からいうと、仏教系新宗教は比較的少数である。金洪喆他『韓国新宗教実態調査報告書』（一九九七）によると、仏教系新生宗団（教団）は七系列、五十六宗団があるとする。圓佛教はその中でもっとも信者が多く、圓佛教を韓国の仏教を主体とする新宗教の代表として扱うことは適切と考える。圓佛教では釈迦を淵源仏として新しく作った教団として自分たちを位置づけている。仏法を主体としてすべての宗教の教理も統合活用して一番円満な完全無欠を志向するとしている。なお、教団側は、仏法に根を持っているが、仏教系の一つの宗派ではなく、独創的な新宗教であると説く。それは、教祖・教理・制度の面で仏教との相違があるためという。

この二つの教団は、規模も比較的似ている。それぞれ数十万人の信者がいると推定される。活動を開始した時期は圓佛教の方が早い。実質的な活動期間はともに五、六十年である。そして信者が高齢化する傾向があるのも共通している。妙智會教団は先祖供養が教えの中軸にあるが、圓佛教はそれを基本教理の一つである「四恩」の中に位置づけている。しかし先祖祭祀はそもそも韓国では重要な儀礼であるので、比較する意味は大きいと考える。

日本も韓国も、二十世紀の末には情報化が進行したわけであるが、二十代や三十代の若い信者は、高齢化した信者と比べて、自分が所属する教団の先祖祭祀について、同じような理解の仕方をしてるのであるか。それともその重要性については変化が生じているのであろうか。両教団については、複数の支部において、教師や信者に対する面談調査を行ってきた。また教団に委託してアンケート調査も実施した。

そうした調査結果から、先祖祭祀が実際にどの程度重要なものとして信者たちに受け入れられているのか。また若い信者たちにおいて、今までと異なった受け止め方が観察されるのか。こうした点を中心に以下で論じてみたい。

一、妙智會教団の先祖祭祀

妙智會教団の開祖は宮本ミツである。現在は「会主」と称されるミツは、一九三四年に実兄の勧めで霊友会に入会し、夫である宮本孝平（現在「大恩師」と称される）は支部長となった。ともに熱心な信仰生活、修行に励んだ。とくに霊友会が説く先祖供養の重要さということを全面的に受け入れ、熱心に実践したとされる。孝平の死去後は、娘婿の宮本文靖とともに霊友会の活動を続けていた。しかし、戦後まもない時期に起こった霊友会内の一連の事件も関係して、ミツは霊友会を離脱した。そして一九五〇年に新たに妙智會教団を結成した。妙智會教団の教えは「先祖供養」、「忍善」、「懺悔」、「感謝」の四本柱であり、日常の実践項目とし、実行する。本部は東京都新宿区代々木、また聖地は千葉県山武郡九十九里町にあり、全国に教会と道場が広がっている。⁽²⁾

宮本ミツが一九八四年に死去したのち、その娘婿の宮本文靖が後継者となり、二代目の会長となっている。そして、文靖の長男の宮本けいしが、理事長として教団の活動において指導的役割を果たすようになった。社会活動への

関心は当初からあったが、開教四十周年の一九九〇年に「⁽³⁾ありがとう基金」を設立し、平和・世界貢献をより強く意識した社会活動をしている。

筆者は、妙智會教団に対する調査を二〇〇五年から開始した。都内にある二つの支部での参与観察を断続的に行った。本部の定例供養会や行事に数回参加した他、二〇〇五年には千葉の聖地修行団参(青年部)、また二〇〇八年には、身延山への修行団参(青年部)にも参加した。こうした機会を通して教団の現況や若い信者に対する聞き取りを行った。

二〇〇七年には教団の協力を得て、二、五〇〇名近い会員に対するアンケート調査を実施した。その調査結果のうち、情報化に対する会員の意識の変化をめぐる問題については、すでに論文として発表した。⁽⁴⁾そこでは、情報化時代に対する妙智會教団側の姿勢や現状は一般社会と比べて進んでいるとは言えないものの、特に若い会員の意識は情報化への対応には相対的に積極性がうかがえることを示した。

本稿ではこの先祖祭祀をめぐる回答結果の項目についてしぼって分析し、先祖祭祀の重要性について世代間で差がみられるかどうかをみてみたい。そしてアンケート結果を解釈するにあたっては、支部参与観察や団参参加の折の聞き取り調査で得られた情報を補足的に用いることにする。

妙智會教団の会員がどのような形で先祖祭祀に関わるのか、少し具体的に述べておきたい。教団単位と各家庭において行われるものとの大きく二つに分けられる。⁽⁵⁾まず本部や聖地で行われるものについて述べる。

妙智會教団の年中行事の中で、まず千葉聖地で行われる行事としては、二大法要である三月二十八日の「会主法要」と、十一月十四日の「大恩師法会」がある。本部に会員が集まって行う年間の儀礼としては、二月の節分追儺式、五月十四日の会長お誕生祭、十月十四日の開教記念式典などがある。こうした儀式のときには、先祖供養に関わる儀礼

が組み込まれる。

本部や聖地における儀式の基本的な流れは、玄題三唱、教団歌奉唱、献灯・献花・献供の儀、導師ご入殿、玄題三唱、ご祈願、読経、祈願文ご奏上、導師ご退殿、体験発表、綱領唱和、会長のご指導、玄題三唱である。

こうした儀礼を行うこと自体に、基本教理である先祖供養が関わるという理解がなされている。

次に一般家庭で行われている儀礼について述べる。各家庭では、会員たちは本尊と先祖の総戒名、先祖の法名が書かれている過去帳がある仏壇に向かって毎朝夕にお経をあげ、朝のみ過去帳をめくり、お水を替える。そして毎日台所にある南無三宝荒神(十二月三十一日に拝受される)に向かって一日の無事を祈る。このように基本的には会員は毎日決められた儀礼を行うこととされている。参与観察した支部でも、支部長をはじめ家族が朝五時に起きて先祖にお経をあげているということを確認した。

① アンケート調査の結果

妙智會教団では毎日朝夕お経をあげるのが修行となっているが、その修行が同時に先祖供養の意味をもっている。したがって、お経をあげる実践度、そしてお経をあげる目的をどう考えているかによって、教団の中心的な教理に対する会員の意識の深さを見ることができるといえる。ここに世代間による差が見られるのだろうか。

二〇〇七年に行ったアンケート調査では、教団会員の基本的属性(生まれ年、性別、在住地域など)、教理に対する考えや信仰の実践度、教団の活動に対する考え、会員同士の連絡手段、インターネットと教団ホームページの利用度、認知度などについて質問した。教団に委託して会員の意識を調べたものであるが、二、四八六(回収数二、六七五、無効回答数一八九)の有効回答数を得ることができた。その中に、次のような項目と回答の選択肢を設けて

おいた。先祖供養と関連するお経をあげる実践度及び目的について質問した二問の結果は、グラフ1とグラフ3に示した。またそれを世代別とクロスした結果は、グラフ2とグラフ4に示した。なお、年齢は五歳ごとに区分してあり、それぞれの年齢層の回答者数を（ ）内に記した。

まず、お経をあげる頻度に関しては、次のような質問と回答の選択肢を用意した。

「Q7. お経をどの程度の頻度であげていますか。

1. 毎日
2. 週1〜2回程度
3. 月2〜3回程度
4. ほとんどあげない

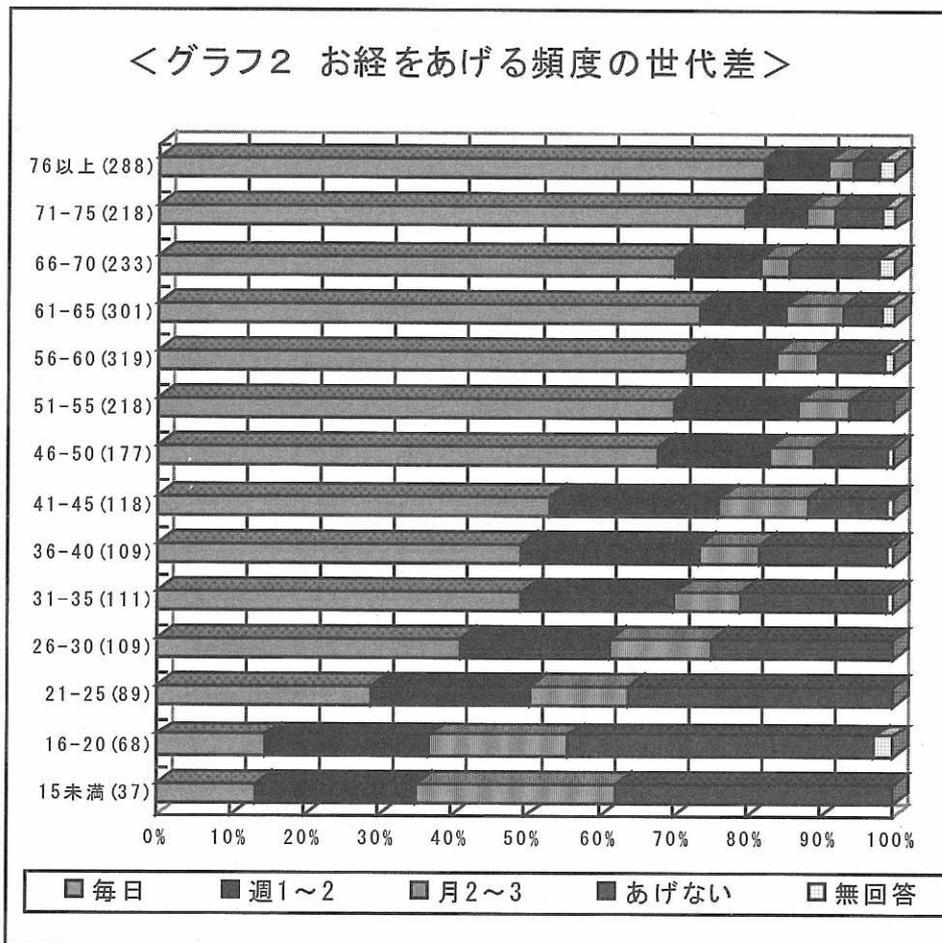
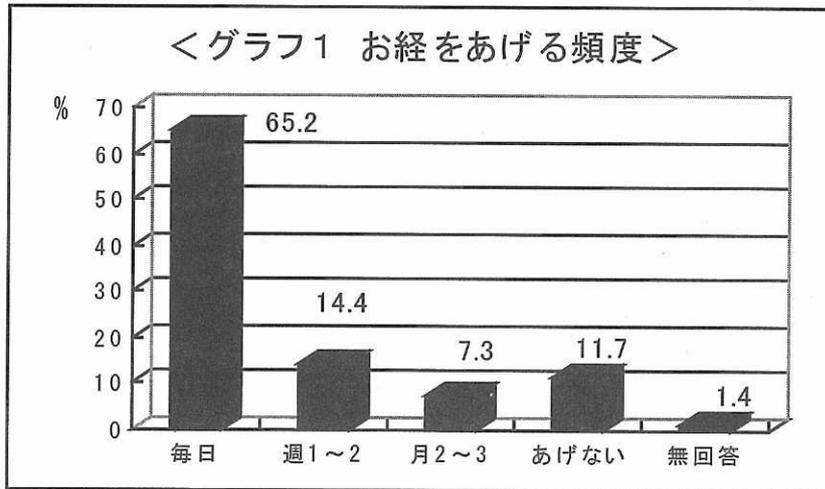
お経を毎日あげると答えた会員は、六割を超えている。高い実践度を示していると考えられる。お経をあげるのには、先祖供養のための重要な儀式の一つであるが、これを毎日行う人が六割を超えるということは、先祖供養を大事にしようとする意識も強いと理解できる。また世代別に比較してみると、明らかに年齢が高くなるほどお経を熱心にあげる傾向がはつきりしていると言える。五十代以上では、毎日お経をあげる人の割合が七割前後あるいはそれ以上に達する。これに対し二十歳未満であると二割にも達しない。

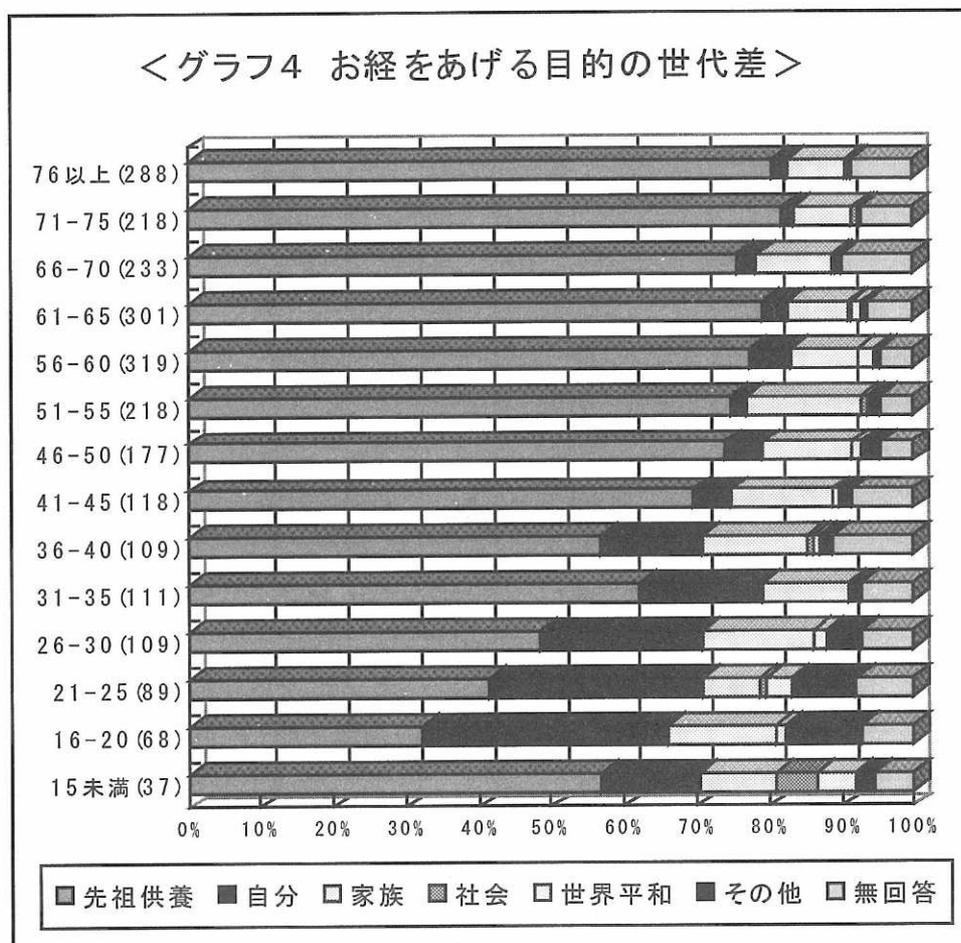
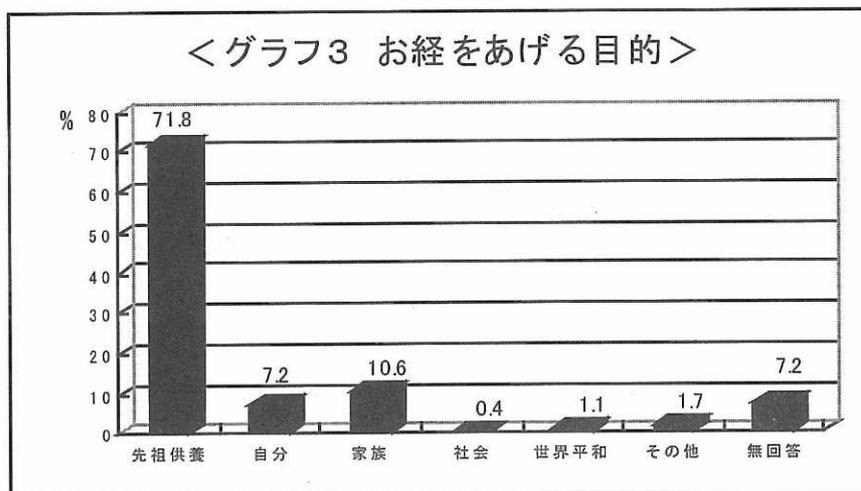
次にお経をあげる目的については、次のような質問と回答の選択肢を設けた。

「Q8. あなたがお経をあげる本当の目的を一つだけ選んでください。

1. 先祖の供養
2. 自分の幸せのため
3. 家族の幸せのため
4. 社会がよくなるように
5. 世界平和のため
6. その他（ ）

回答結果を見ると、お経をあげる際に、教団会員がもっとも意識しているのは教理の四本柱の一つであり、教団の





中心教理である「先祖供養」であることが分かる。その次は「家族のため」と「自分のため」であるが、「社会のため」がもっとも低い割合を占めている。その他の意見として記載されたものの中には、「選択肢全部」、「流産児供養」、「受験勉強」などがあつた。先祖供養を選んだ人が七割以上という数値になつた。これは会員は教団の中心教理を理解し、認識しながら忠実に実践していると解釈できる。

では先祖供養のためにお経をあげるといふ人の割合は、世代別にみると、どれくらいの違いがあるのだろうか。年齢とクロスしたのがグラフ4であるが、七十歳以上になると先祖供養のためという割合が約八割になるが、十六歳二十歳においては自分のため(三三・八%)が先祖供養のため(三二・四%)を上回っている。十五歳未満では、十六歳二十歳よりも先祖供養のためと答えた割合が高いが、これはまだ親の影響力が大きいからかもしれない。

② 面談調査によって得られた傾向

このアンケートの結果からは、全体としてお経をあげる頻度も高く、またお経をあげる目的としては、先祖供養のためというのがもっとも多いということが分かつた。アンケートの結果はこのようなものであつたが、実際に会員の先祖供養に対する意識をサンプル的に確認するために行った三つの支部における参与観察の結果について補足的に示したい。

この参与調査では、支部の法座に参加したり、支部長宅に泊まつたりして、信仰がどのように実践されているかを観察したものである。調査したのは東京都内の三支部である。調査は二〇〇五年から二〇〇六年にかけて行われた。二〇〇五年二月に、二つの支部には一回ずつ、一つの支部には数回の調査を行った。支部長、その家族、及び法座に参加した会員への聞き取り調査が主体である。

妙智會教団に入会した動機や教理に対する意見、先祖供養の実践などさまざまな質問をし、法座の様子を観察したが、そのうち先祖供養に関する聞き取り結果から特徴的な事柄を示したい。さらに支部長（五十代）や同世代の信者と、その子どもにあたる世代とで、実践の仕方や意識に違いがあるかについても聞き取るように心がけたので、それについても示したい。

まず、支部における法座の行事に参加する会員は大体十名前後である。平日ということもあって、あまり多くはなかった。またもともと会員数が少ない法座もあった。世代で見ると、四、五十代以上が中心で、高齢化が進んでいるように感じた。したがって、多くの聞き取りは高齢者からのものにならざるを得なかった。

妙智會教団では、「先祖供養とは、ご先祖さまに感謝し、その恩に報いることです。そのため朝夕、真心の供養をささげて、ご先祖さまの成仏を願うことが大切です。ご先祖さまが成仏していないと、その苦しみが子孫に反映いたします。（省略）」⁽⁸⁾と説いている。先祖と自分は「合わせ鏡」だという概念で説明している。これは、自分が現在苦しい状況にあるのは先祖が成仏できてないためであり、先祖にとってはご飯のようなものであるからお経をあげて成仏させることが大事であるということを意味する。

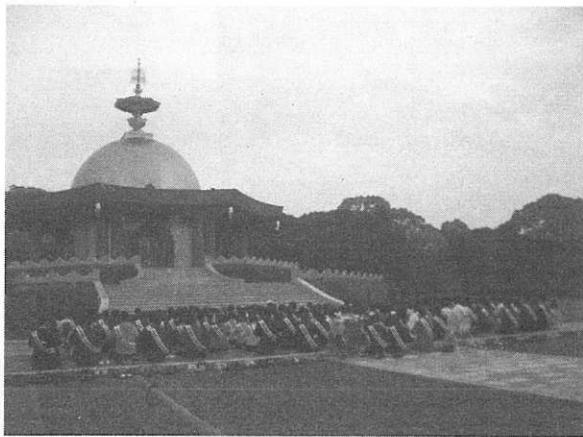
先祖供養のための修行には、お経、布施、身施、お導きなどがあげられるが、一番難しいのはお導きであるとされる。一人を導くたびに先祖一人が成仏できる、という考えに基づき、導きを行っている。中心教理として先祖供養を強調しているが、そのための修行はすなわち自分の幸福につながるという考えである。

先祖供養のためにお経を毎日あげることが大事だということは教団の方針なので、面談調査では、先祖供養は何のためにするのかと全員に質問した。「自分のため」、「家族のため」と答える人がほとんどであった。これは利己的な意味というより、妙智會教団が、先祖を供養することは、結局は自分のため、家族のため、というふうに教えているか

らであるとして理解した方がいいと考える。

また若い世代の信者には、聖地修行団参と身延山修行団参に参加した際に聞き取り調査ができた。参加者全員に聞き取り調査は出来なかったが、同じ部屋の人十五名ほどに話を聞くことができた。アンケート結果に対応するように、お経をあげる頻度は高齢者に比べると高くなかった。理由としては、お経あげるの嫌いなわけではないけど、忙しい、疲れているから頻繁にはあげられないという回答があった。ほぼ毎日あげていると答えた人は青年部の役を持っている人で、責任感を感じるからという答えであった。

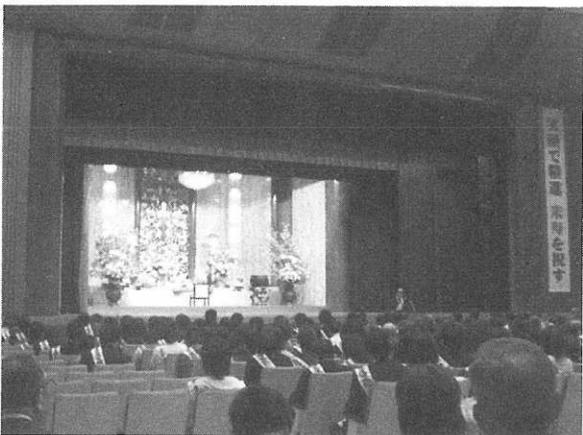
他方で、お経を唱えても唱えなくても同じ一日なのにと疑問を持った時もあったが、今は習慣になっているという回答もあった。実践はうまくできてないが、お経をあげると先祖が成仏できるような気がするし、仕事や嫌な気分が解決できるような気がするという回答もあって、



聖地の青年部団参（久遠仏塔の前）



聖地での会主法要



代々木本部の定例供養会



聖地の大恩師の法会



身延山への修行団参（青年部）



六十一支部の法座（お経をあげる）



六十一支部の法座（相談）

できればお経をあげようとする意識は持っていることも分かった。

お経をあげる目的については、一応先祖のためにあげるものだということは答えるのだが、結局自分のためにあげるという答えになるものがほとんどであった。一日を無事に過ごせるようにとか、病気が治るようにとか、家族のため、友達のためという答えがあった。友達とうまくいかない時や、仕事がうまくいかない時など、つまり自分の身の回りの物事と関係するケースが多かった。

面談した若い会員に限ると、先祖供養が信仰の中心であることは認識されており、そのための儀礼も欠いてはいけないという意識を持っていることが分かった。面談調査ではお経をあげる目的において、若者たちが日常的に抱える問題と直接的に結び付いている傾向が強いことが分かった。ただ、これだけで先祖祭祀に対する意識の大きな変化を示しているとは解釈できないと考える。

二、圓佛教の先祖祭祀

圓佛教⁽⁹⁾の創始者は、少太山(朴重彬、一八九一〜一九四三)である。少太山は、一八九一年全羅南島靈光で生まれ、幼い頃から自然現象と人生に疑問を持ち、二十余年間修行の道を歩み、一九一六年に悟りを得た。そして一九一六年四月二十八日に全羅南道益山市に圓佛教を設立した。当初は「仏教研究会」と名乗って活動を始めた。「物質は開闢される、精神を開闢しよう⁽¹⁰⁾」という開教のモットを掲げ、宗教研究・教化活動とともに事業も展開することで経済的、精神的な基礎を作っていくことを目指している。一九四五年八月に日本の支配が終わったあと、名称を「圓佛教」とした。以前よりは宗教活動が自由になったため、各地に教勢を広め、信者を獲得していく。一九四三年少太山の死去

後、法統は彼の弟子である鼎山（宋奎、一九〇〇～一九六二）と大山（金大舉、一九一四～一九九八）へ継承され、現在には左山（李廣淨、一九三六～）が四代目の宗法師を務めている。

全羅南道益山市に圓佛教の聖地があり、教団施設が多くある。韓国全国に「教堂」と呼ばれる支部があり、国外にも複数の教堂がある。⁽¹¹⁾ 圓光大学をはじめ圓光保健専門大学、圓光高校など教育事業にも関わっている。慈善事業として総合社会福祉館、総合病院、漢方病院などの医療事業、出版、文化事業も展開している。

圓佛教では宇宙の真理を一圓の真理とし、これを「〇」として表現して「法身佛一圓相」とし、信仰の対象、修行の手本としている。圓佛教の教理体系は「法身佛一圓相」を宗旨とし、信仰門と修行門に分けられる。⁽¹²⁾

「因果報応の信仰門」は、天地、父母、同胞、法律の「四恩」に対する報恩と平等世界建設の方法である自力養成、智者本位、他子女教育、公道者崇拜の「四要」の実践によって平和と幸福の世界をつくっていくという〈人生の要道〉を示したものである。

「真空妙有の修行門」は、精神修養、事理研究、作業取捨の勉強である「三学」と三学の根本となる進行四カ条（信、念、疑、誠）、捨損四カ条（不信、貪欲、懶、愚）があり、〈勉強の要道〉を示す。〈人生の要道〉と〈勉強の要道〉の教理体系は「正学正行」「知恩報恩」「佛法活用」、「無我奉公」の四大綱領をもって楽園を開拓するという目的をもつ。

圓佛教の儀礼は、大きく次の三つに分けられる。

- 一、すべての人が通常行う「通礼」。
- 二、出生、成人、結婚、還暦、喪葬、齋など家庭で行われる「家礼」。
- 三、教団内で行われる「教礼」。

圓佛教の基本教えの一つに「四恩」、すなわち天地恩、父母恩、同胞恩、法律恩という四つの恩に報じるという教

理がある。このうちの父母恩に報⁽¹³⁾じる信仰が先祖祭祀と深く関わっているということになる。父母恩に報じるということ、これを簡単に説明すれば、父母がいるからこそ、自分は存在するのであるから、親孝行することは当然である。父母が亡くなってからは、追慕記念と次に述べる薦度齋を行う。

圓佛教の記念日は、慶祝日と大齋に分けられる。慶祝日は、新正節（一月一日）、大覚開教節（四月二八日）、釈尊聖誕節（旧暦四月八日）、法認節（八月二一日）がある。先祖祭祀と関わりが深いのは大齋と呼ばれる儀礼の方で、六・一大齋、名節大齋、薦度齋の三つがある。六・一大齋は六月一日に行われ、少太山が死去（教団では「涅槃」と表現する）した日である。すべての聖賢、一切父母、一切生靈を追慕する意味を持ち、合同で享礼（大齋を行う礼法）を行う。名節大齋は十二月一日に行われ、合同享礼である。これは、すべての聖賢、一切父母、一切生靈に追遠報本の誠意をするものである。そして、薦度齋⁽¹⁴⁾は涅槃人が成仏できるように祈願する儀式である。法師の法力と遺族及び参列者の真心をこめるほど薦度がうまくできるという。経費を節減して行い、その節約された経費は布施となり、公益事業に使うこととされている。このような圓佛教での儀式は、過去の礼法の虚礼を打破し、消費する部分を節約する、つまり儀礼を簡素化することに特徴がある。

圓佛教の「法会」は、毎週日曜日に行われる定例法会と期間を決めて随時に行われる随時法会、夏冬の特別講習会などの年例法会、参加対象による一般法会、青年法会、子供法会、夫婦法会などもある。法会ごとに儀礼順の差はあるが、基本的な流れは、開会、仏殿拝礼、入静（坐禅）、一圓相誓願文・般若波羅蜜多心經（読経）、教歌、法語奉読（教典や宗法師の法語を奉読し、謹んで聞く）、聖歌、説教、日常修行の要法、默想心告、閉会の順である。

圓佛教の国外教堂の中で、日本には現在、東京、横浜、大阪に教堂がある。最初の教堂は六十年代に布教を始めた横浜教堂である。東京教堂は九〇年代に錦糸町に拠点を置き活動を始めたが、二〇〇六年五月に金町に移転して奉仏

式を行い、本格的な教化活動が開始された。

圓佛教への調査は二〇〇六年に開始した。東京教堂を主な調査対象にして数回訪問した他、益山聖地⁽¹⁵⁾を訪問し、教団の関係者や信者に面談調査を行った。また二〇〇八年には、妙智會教団に対するものとはほぼ同じ内容のアンケートを実施した。やはりアンケート調査の結果を中心に、面談調査で得られた情報を加えて信者の先祖祭祀に関する考え方あるいは世代間に相違がみられるかなどについて分析を試みる。

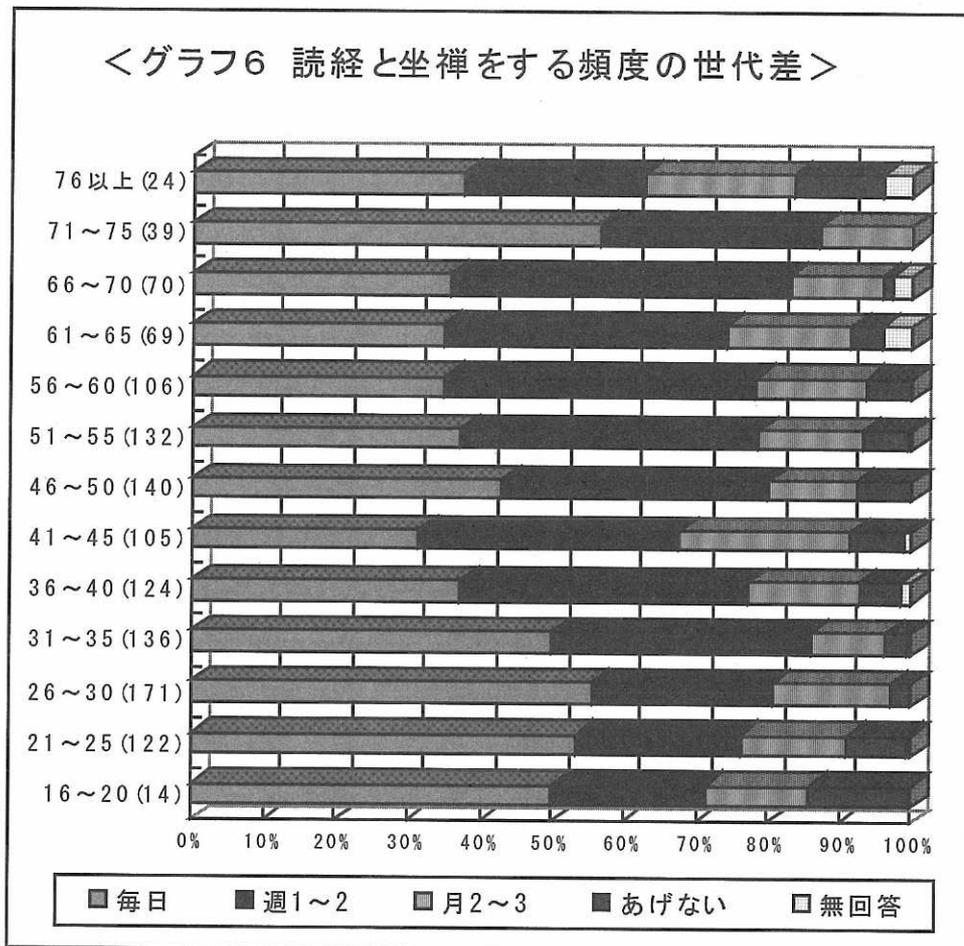
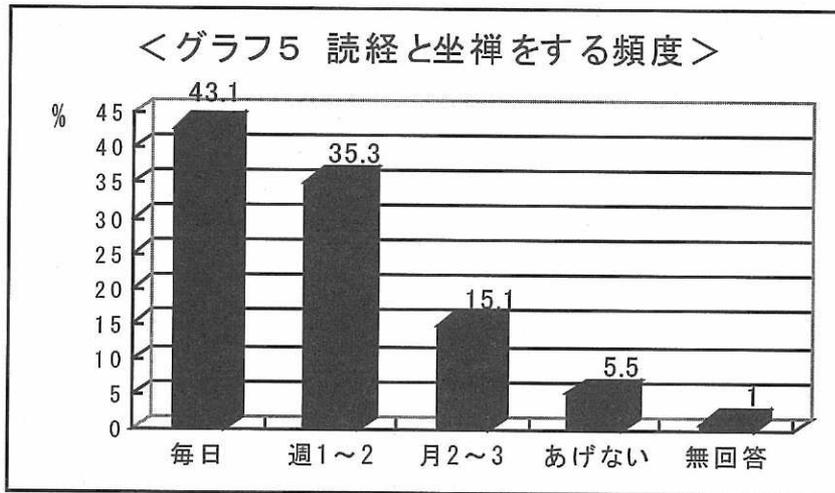
①アンケート調査の結果

妙智會教団で実施したアンケート調査との比較のため、圓佛教教団にもほぼ同様な項目でアンケート調査を行った。⁽¹⁶⁾法会や教団の行事の際に配布・回収する方法で、約二千部を配布し、一、二五二部の有効回答を得た。先祖祭祀と関連する大齋や日常の修行に行われる読経と坐禅の実践度及び目的について質問した二問の結果は、グラフ5とグラフ7に示した。またそれを世代別とクロスした結果は、グラフ6とグラフ8に示した。なお、年齢は五歳ごとに区分してあり、それぞれの年齢層の回答者数を()内に記した。

まず、読経をする頻度に関しては、次のような質問と回答の選択肢を用意した。妙智會と少し質問内容が異なり、坐禅が加わっている。⁽¹⁷⁾これは圓佛教においては日々の活動で坐禅が重視されているからである。圓佛教が設立した中学や高校の授業でも坐禅が取り入れられている。

「Q7. 読経と坐禅はどの程度の頻度でおこなっていますか。

1. 毎日
2. 週1〜2回程度
3. 月2〜3回程度
4. ほとんどあげない



圓佛教の教徒は読経と坐禅をどの程度の頻度で行っているのかという質問であったが、四割以上が毎日であり、週一、二回が三割以上、合わせるとほぼ八割近い高い割合となる。教徒の実践度は比較的高いとみなせる。

世代間の差はあまりはつきりとはあらわれていない。むしろ二十、三十代の回答者の実践度が若干高いという傾向がうかがえる。

読経と坐禅の目的について、次のような質問と回答の選択肢を設けた。

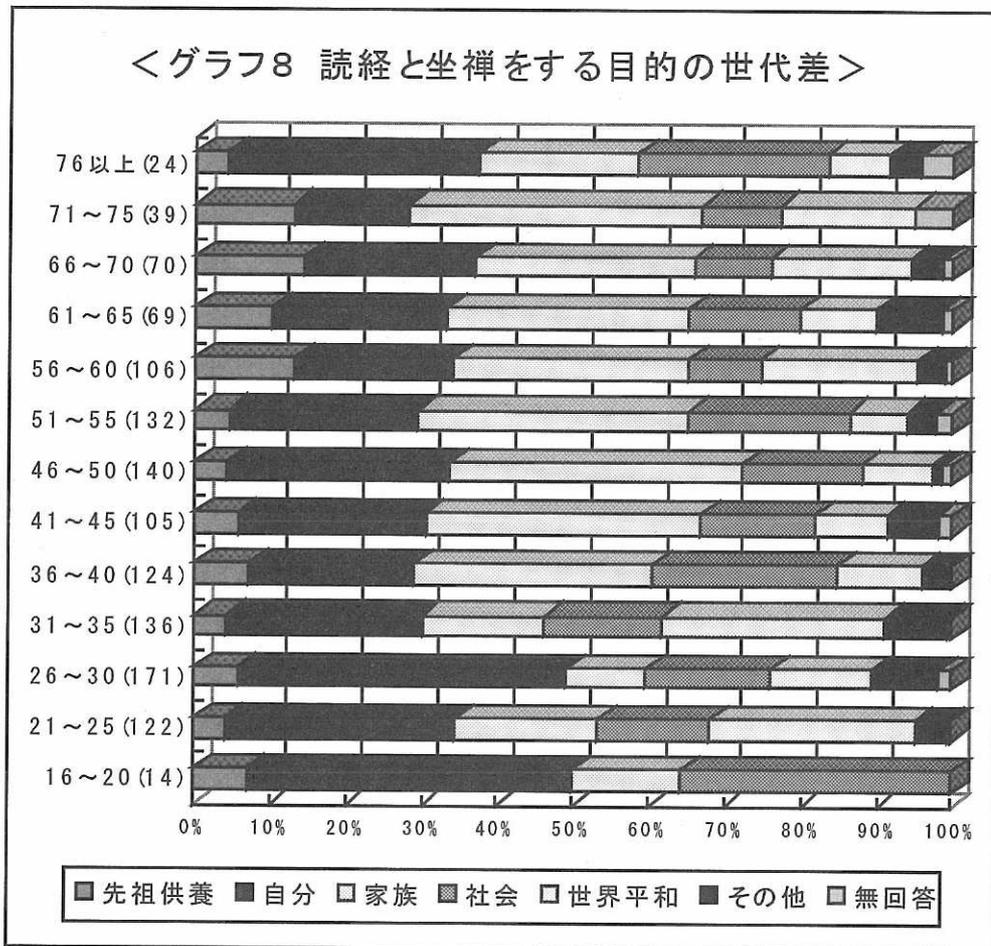
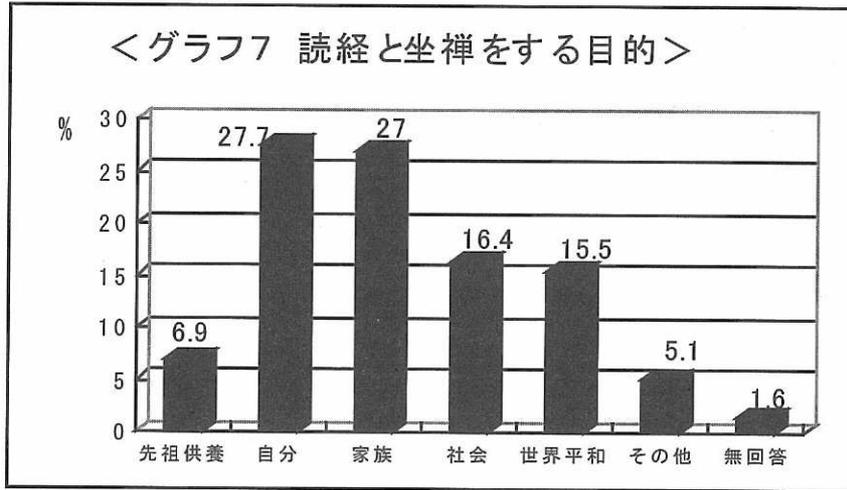
「Q8. あなたが読経と坐禅をする目的を一つだけ選んでください。

1. 先祖の供養
2. 自分の幸せのため
3. 家族の幸せのため
4. 社会の平穩
5. 世界平和のため
6. その他（ ）

読経と坐禅をする目的についての結果をみると、「自分のため」、「家族のため」が三割近い割合を占めていて、読経や坐禅をするという信仰生活の根底にはやはり現世利益を求める意識が比較的強い。しかし、読経と坐禅をする目的が個人のレベルのみならず、「社会の平穩」十六・四%や「世界平和のため」一五・五%という社会レベルの意識も持っている。

読経と坐禅をする目的についての世代間の差はそれほどない。先祖供養のために読経と坐禅をするという回答者の割合は平均して一割に満たないが、五十代〜七〇代では一割以上になっている。七十六歳以上になると「自分のため」に読経と坐禅をするが三三・三%という高い割合になる。十六〜二十歳と二十代後半も「自分のため」と答えた割合が四割以上の高い割合をみせる。

なお「世界平和のため」と答えた割合は、三十代前半がもっとも高く、二九・四%にのぼった。しかし三十代後半は



一一・三%とその半数以下なので、世代の傾向としてはみなせない。

②面談調査によって得られた傾向

二〇〇五年六月には横浜教堂に「六・一大齋」に参与観察を行った。横浜教堂は最初の日本布教地であり、一般住宅を改造して教堂にしたところである。教徒は少なく、在日韓国人が中心教徒であった。教堂では「供養」という表現で布施をするが、献金をする人もいるが、食べ物や料理などを持ってきて法会が終わった後、参加したみんなと食事をし、談話する機会が多い。横浜教堂では、主婦向けのヨーガ教室を開いたり、子供向けの絵描き大会をしたりした。参与観察した日には、その授賞式を行い、お菓子の商品を渡す場面があった。

東京教堂には二〇〇六年から現在まで数回にわたって参与観察調査を行ってきた。ここでも「六・一大齋」に参加したが、先祖祭祀とともに現在の自分の一番望んでいる事を紙に書いて祭壇の前方に掛けてあるお灯に参加者がおのおの辞儀をしてお願いしながらかけるという儀式を行った。留学生が主な教徒として参加する法会では、留学生活での近況や悩みなどを相談する場としての役割が主であるという特徴がある。東京教堂では、法会を必ず教堂という場所に限らず、教徒の家での法会や祭りなどに参加して楽しむというやり方もある。いつも読経をして教理の勉強をするのではなく、教務(圓佛教の出家者)と教徒間の楽しい親睦・交流を楽しむ時もある。

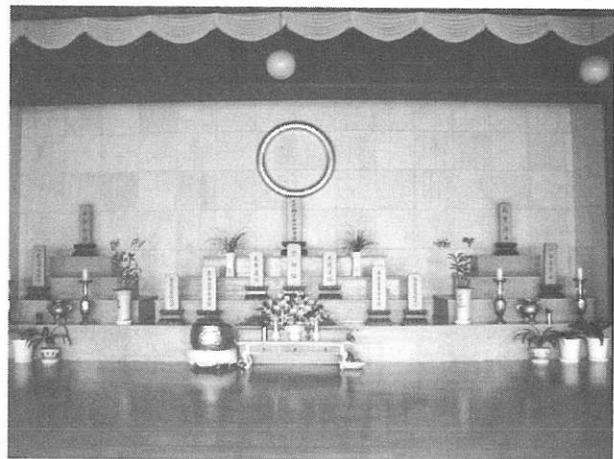
二〇〇六年八月には釜山にある教堂の一つである西面教堂での面談調査を行った。全体の法会が終わった後、十名以下の人々がそれぞれのグループを作って「心の勉強」をする場に参与観察ができた。心の勉強の方法はさまざま(18)で、ここでのやり方は日記を書いてきて、みんなの前で読上げる。妙智會教団で言う発露懺悔のように反省をし、それに対してみんなが意見を出し合うということであった。教務がそれぞれのグループを回りながら、アドバイスをしたり

する場面もあった。ここでも先祖供養に関することよりは現在の自分の生活においての悩みなどが主なテーマになっていた。

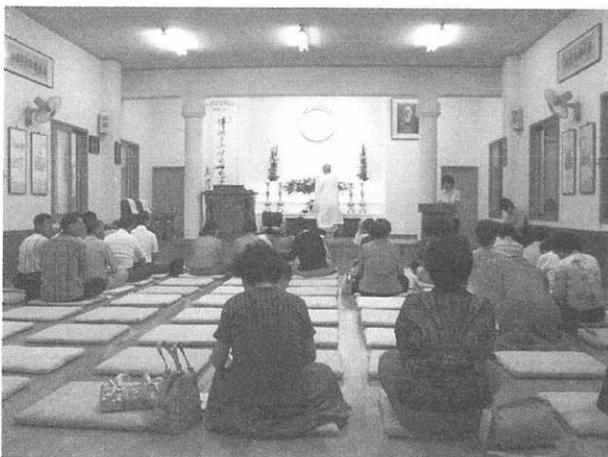
圓佛教教団における面談調査は妙智會教団と比べてその回数は少なく、ほとんど日本の教堂が中心になったものである。三カ所の法会を参与観察した結果をまとめると、圓佛教では基本的な行事の流れは大きく異ならないが、行事のあとの信者同士の懇親のやり方は、それぞれ非常に個性的で、教堂の教務や教徒のそれぞれの方針に任せられていることが分かる。またそうした場で、先祖祭祀に関わることをとくに強調する場面は観察できなかった。



横浜教堂（六・一大齋）教務



聖地の永慕殿



釜山西面教堂の法会の様子



横浜教堂（六・一大齋）仏壇

三、妙智會教団と圓佛教の比較

先祖祭祀は日本及び韓国でも依然として重要な儀礼である。特定の教団に属していない人でも、先祖祭祀には関わりをもっているのが普通である。日本では春秋のお彼岸やお盆の際に先祖祭祀が行われる。韓国ではお正月とチュソクでのチャレ、先祖の命日のチュサなどの際に先祖祭祀が行われる。日本では先祖祭祀には仏教が関わるのが一般的だが、韓国では儒教が関わってきた。

しかし、情報化などによって、人々はいろいろな宗教の情報に接するようになったわけであるが、伝統的な先祖祭祀が今までと同じ感覚で続けられることになるのだろうか。とくに信仰を持たない人の場合は、もともと社会習俗の一つとして受け入れている面もあるが、先祖祭祀が、先祖供養、先祖祭祀を大切にすることが教えの柱になっているような教団の場合は、その重要性についての認識に変化は生じていないのであろうか。

妙智會教団に対するアンケートの結果からは、先祖供養が中心教理であるため、お経をあげる目的が先祖供養である割合は高い。ただ世代間の差に関しては、若い世代より高齢者ほど先祖供養の実践度も目的意識も高いという結果であった。

一方、圓佛教における今回のアンケート結果からは、読経や坐禅といった宗教儀礼を行う実践度は高かったが、世代差はあまり見受けられなかった。また目的においては先祖供養が主ではないが、自分や家族以外にも社会や世界平和のためという答えが若干目立つ結果であった。ここにも世代間の顕著な差は見えなかった。

妙智會教団では先祖供養が重要な位置を占めており、多くの会員がそれを実践しているので、世代間の差が観察しやすかったが、圓佛教では先祖供養を第一に考える割合が全般的に低かったので、世代間の差は見えにくいという面

もある。しかし、他の回答にも世代ごとのはっきりとした変化の傾向がみとれないので、少なくとも今回の調査からは世代間の意識の差はあまりないものとみなすべきである。

先祖祭祀の重要性は明らかに妙智會教団の方が高かったが、逆にお経をあげる目的に社会的意味をこめる割合は、圓佛教の方が高い。お経をあげる目的が「社会のため」、「世界平和のため」という回答では、妙智會教団は二つの項目を合わせて一・五%に対して、圓佛教では合わせて三一・九%という結果であった。妙智會教団は先祖供養のために、圓佛教は自分、家族以外にも社会や世界平和のためにお経をあげるという結果であるが、これは明らかに教団が掲げている教理を反映している。

情報化をはじめとする現代社会の変容は、伝統的観念に基づいた宗教儀礼に対しても影響をもたらしているが、以上の結果からはそれは急激な実践上の変化としては見えていないと言える。ただ、アンケートは教団に委託したものであり、したがって、比較的熱心な会員あるいは信者が多く回答しているという可能性も考えられる。その可能性を考慮すると、今回のアンケートがそれぞれの教団の信者の傾向を正確に反映しているとみなすことはしない方がいいかもしれない。

しかし、それでも両教団において世代間の意識の差は生じつつあるということが言える。面談調査の結果をあわせて考えると、そのような見方が適切と考える。若い世代では、面談調査においても、一応先祖供養は大事であるという教えは受け入れていても、実践においてそれほど真剣ではない面が観察されたからである。ただ、これが日本や韓国の最近の社会変化を反映したものであるのか、あるいは高齢者も、若い頃は先祖祭祀以外の目的に関心をもっていたのかは、今回のアンケート調査だけでは結論できない。今後、高齢者に対し、若い頃と先祖供養に対する考えが変わったかどうかを調べるなどの調査を重ねる必要性があることをつけ加えておきたい。

註

- (1) 井上順孝編『新宗教教団・人物事典』弘文堂、一九九六年。井上順孝編『近代日本の宗教家一〇一』新書館、二〇〇七年参照。
- (2) 山形、秋田、新潟、群馬、山梨、九州教会、小名浜、名古屋道場がある。
- (3) 「ありがとう基金」のホームページ (<http://www.arigatou-net.or.jp/>) を参照。ユニセフ、UNHCRなどの国連機関やNGOとも協力しながら、世界各地の紛争や災害による被災者への緊急支援、子どもたちの生存、発育のための継続支援など、子どもを取りまく環境改善に向けてさまざまな活動を行っている。
- (4) 拙稿「情報化時代における妙智會会員の意識(一)」『国際宗教研究所ニュースレター』第五十六号、二〇〇七年十月二十五日、「情報化時代における妙智會会員の意識(二)」『国際宗教研究所ニュースレター』第五十七号、二〇〇八年一月二十五日。
- (5) 一月の新年拝賀祈願式(本部および各教会、道場)、寒修行(本部および各教会、道場)。二月の節分追儺式(本部および各教会、道場)。三月の会主法要(千葉聖地)。四月の釈尊ご降誕祭礼(千葉聖地)。五月の会長先生お誕生祭(本部)。七月の盂蘭盆法要(本部および各教会、道場)、戦没者盂蘭盆法要(千鳥ヶ淵戦没者墓苑)。十月の開教記念式典(本部および各教会、道場)。十一月の大恩師法会(千葉聖地)、南無三宝荒神拝受式(山形、秋田、新潟地区)。十二月の南無三宝荒神拝受式(山形、秋田、新潟地区を除く全支部 於本部)。聖地修行団参、身延修行団参は毎年日にちが発表される。『妙智會手帳』妙智會教務部、二〇〇四年。
- (6) 先祖供養が中心となるもので、両家の先祖全てが集められる。「誠生院法道慈善施先祖〇〇家(両家)徳起菩提

心」と書かれていて、本部から拝受されるものである。

(7) この内容は、支部参与観察での聞き取りで得たものであるが、『妙智會の手帳』では、南無三宝荒神の意味や拝受の心構えと誓願、祀り方、場所、日常の給仕と礼拝の仕方などが細かく書かれている。

(8) 『妙智會手帳』妙智會教務部、二〇〇四年。

(9) 圓佛教はインターネットサイト (<http://www.won.or.kr/> 韓国語、英語、エスペラント語) が充実しており、圓佛教の教団の紹介、教理の説明、圓佛教用語辞典、e 經典・法文集、宗法師法文、公知事項、韓国全国各地や海外の教堂のサイト、圓佛教中央総部、サイバー教堂、圓佛教TV、圓佛教軍宗(軍隊内での信仰生活)、圓音放送、圓佛教新聞、歴史博物館、漢方健康TVなどのサブサイトがある。分かりやすく、詳しく説明されており、教団の写真やサイバー聖地巡礼という映像も簡単に見ることができる。

(10) 「今日、科学文明が発達するにともない、物質を使用すべき人間の精神は次第に衰弱し、人間の使用すべき物質の勢力は日増しに栄え、衰弱したその精神は、物質の支配に屈服することによって、すべての人々はかえって物質の奴婢生活を免れないようになった。(省略) それゆえに、真理的宗經の信仰と事実的道德の訓練により精神の勢力を拡張して、物質の勢力を屈服させ、波らん苦海にあえぐいつさいの生靈を廣大無量な樂園に導こうとするのが、本教を開いた動機である」と開教の動機を明らかにしている。圓佛教中央本部『(日本語版) 圓佛教經典〈正典・大宗經〉』一九七五年。

(11) 国内には十五の教区四五〇余カ所の教堂、国外には四つの教区十三ヶ国三十余カ所の教堂がある。アメリカ、日本、カナダ、ドイツ、南アフリカ、フランス、中国などに八十名の教役者が派遣され、教化活動を担っている。

(12) 一圓相の真理を悟る道は、信仰と修行を通して可能であるとし、その道を人が通る「門」に比喩して表現して

いる。

- (13) 朴聖子「圓佛教孝思想の研究―父母恩を中心に―」圓光大学校圓佛教学大学院修士論文、一九九四年。金進東「父母報恩に関する研究」『圓佛教学研究』九、一九七九年。
- (14) 朴連蘭「圓佛教薦度儀礼に関する研究」圓佛教学大学院、修士論文、一九九六年。
- (15) 一九二四年に建設された益山聖地は、現在は圓佛教学中央総部があつて教化、行政、文化、産業の中心地になっている。それ以外の聖地は少太山の誕生地である靈山聖地、公式的に教化活動を始め邊山聖地（少太山が草創期に教理と制度を草案したところ）、満徳山聖地（少太山と弟子が最初に禪を得たところ、全羅北道チンアン郡）、星州史跡地（鼎山が誕生、成長、救道したところ、慶尚北道ソング郡）などがある。
- (16) 二〇〇八年に、圓光大学の教授であり、また圓佛教学の教務の役にある梁銀容教授に依頼して実施した。
- (17) 坐禪は妄念をことごとくとり去って、真如の本姓おあらわし、いつさいの火気をくだして清浄な水気をふやすようにする勉強なのである。圓佛教学中央本部『日本語版』圓佛教学經典〈正典・大宗經〉一九七五年。
- (18) 自分の犯した罪を、言葉に出してあやまることを言う。心のシミを抜き、心のアカを選択するのが妙智會の懺悔であると説く。

〈参考文献〉

教団刊行物（日本語）

・圓佛教学中央本部『日本語版』圓佛教学經典〈正典・大宗經〉一九七五年。

- ・ 信仰の光社編『妙智への道』信仰の光社、一九五二年。
- ・ 宮本ミツ『道』妙智會奉賛会、一九七七年。
- ・ 妙智會教団『会主さま』妙智會奉賛会、一九九〇年。
- ・ 妙智會教団『大恩師』（大恩師五〇回遠忌記念特別集）、一九九四年。
- ・ 妙智會教務部『妙智會手帖』妙智會奉賛会、二〇〇四年。

研究書（日本語）

- ・ 井上順孝他編『新宗教事典』弘文堂、一九九〇年。
- ・ 井上順孝他編『新宗教教団・人物事典』弘文堂、一九九六年。
- ・ 梅原正紀ほか「妙智會—先祖供養と忍善への道」『新宗教の世界Ⅲ』大蔵出版、一九七八年。
- ・ 孝本貢著『現代日本における先祖祭祀』御茶の水書房、二〇〇一年。
- ・ 国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告 第四十一集』（家族・親族と先祖祭祀）、一九九二年。
- ・ 竹田旦著『祖先崇拜の比較民俗学』吉川弘文館、一九九四年。
- ・ 崔吉城著・重松真由美訳『韓国の祖先崇拜』御茶の水書房、一九九二年。
- ・ 森岡清美・西山茂「新宗教の地方伝播と定着の過程—山形県湯野浜地区妙智會員調査から」『宗教と社会変動』東京大学出版会、一三七—一九四、一九七九年。
- ・ 森岡清美「妙智會會員の宗教意識」『季刊現代宗教』一一五、一九七六年。
- ・ 渡辺雅子「新宗教における世代間信仰継承—妙智會教団山形教会の事例」『明治学院大学社会学部付属研究所年報』

・R・ジャネリ・任敦姫著・樋口淳(他)訳『祖先祭祀と韓国社会』第一書房、一九九三年。

教団刊行物(韓国語)

・圓佛教教化研究会『圓佛教的世界観の認識と実践』ミョンジン、一九九〇年。

・圓佛教教化研究会『韓国近代史からみた圓佛教』ウオンファ、一九九一年。

研究書(韓国語)

・金進東「父母報恩に関する研究」『圓佛教学研究』九、一九七九年。

・金洪喆・柳炳徳・梁銀容『韓国新宗教実態調査報告書』円光大学校宗教問題研究所、一九九七年。

・金洪喆・柳炳徳・梁銀容『韓・中・日三国新宗教実態の比較研究』円光大学校宗教問題研究所、一九九二年。

・朴聖子「圓佛教孝思想の研究—父母恩を中心に—」円光大学校圓佛教学大学院修士論文、一九九四年。

・朴連蘭「圓佛教薦度儀礼に関する研究」圓佛教学大学院、修士論文、一九九六年。

・柳炳徳『圓佛教と韓国社会』シイン社、一九八六年。

・柳炳徳『圓佛教思想の展開』上下、教文社、一九九〇年。

・韓国宗教研究会『韓国新宗教調査研究報告書』一九九六年。